

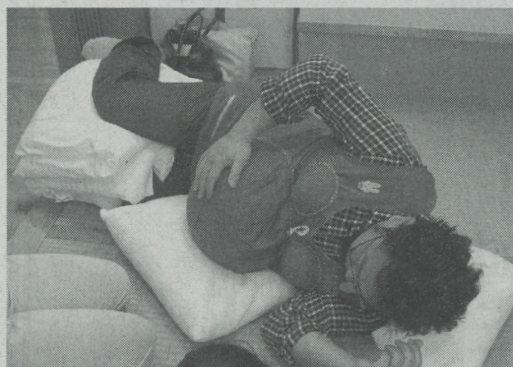
私の頭の片隅に「一人称複数」という言葉があります。誰から聞いた言葉か忘れましたが、不思議な言葉ですよね、私が複数いるわけですから。私の理解では、これは「僕」「俺」「拙者」という呼び方の問題ではなく、「子ども」「働き盛りの私」「病気を患う私」「高齢の私」という複数が同居した「私」です。

さて、私には小学生の子どもが2人います。妻の妊娠から第一子の誕生の時は、とにかく「あたふた」するばかりでした。私の「一人称複数」のラインアップの中に「母親の私」はなかったのです。いろいろと気付けなはずですね。それでは、少し科学の視点を借りて考えてみたいと思います。

出産を控えた女性の体では、エストロゲンという女性ホルモンが右肩上がりに増加します。そし

高知大学男女共同参画推進室長 広瀬 淳一

「他者も自分」の想像力を



ひろせ・じゅんいち 1971年、千葉県生まれ。青年海外協力隊員としてパラオで活動。在パラオ日本国大使館専門調査員、国立女性会館特別専門職員、国際協力機構（JICA）ザンビア事務所を経て、2012年より高知大学に勤務。こうち男女共同参画センター「ソール」評議員。パラオでは一般家庭に2年間ホームステイし、母系社会を日常から学ぶ。ザンビアでは生後7カ月の娘とワークライフ・バランスの取れた在外勤務を築んだ。

て、赤ちゃんが生まれると、その増加はピタッと止まります。その急激な変化は脳の扁桃体という部分を刺激します。扁桃体は「不安だ」「怖いな」という感情に関係するところです。つまり、出産後の女性は赤ちゃんに会えた喜びだけでなく、漠然とした不安の感情を抱えることになるのです。この不思議な現象は、一説には、母親が仲間助けを求めることを促すためとも言われます。進化の過

程で「共同養育」するようになってきた人間の社会的動物としての側面かもしれません。人間は一人で育児する前提にはできていないのですね。

私たちの暮らしは豊かになりました。しかし、核家族化に加え、パートナ―は長時間労働で家にいる時間が少ないという現状があります。出産後の母親が不安を感じ、周囲に助けを求めているのに、一番身近な家族からもそれが得られないことは、とても苦しいことだと思いますし、産後うつとの関係性も指摘されています。

いま育児休業を取得したいと考える男性が増えています。一方で、職場に「迷惑を掛けたくない」「申し出にくい雰囲気がある」などの理由から取得を躊躇する男性も多いと聞きます。このような現状がある中、仕事と家庭の両立

をマネジメントできる「イクボス」のような管理職の存在が注目されています。性別にかかわらず従業員の満足度が高い職場では仕事のパフォーマンスや成果も高いと聞きます。私はこのような管理職はきつと「一人称複数」の視点で仲間のことを考えられる人なのだろうと思います。

倫理という言葉があります。「倫」は仲間、そして「理」は決り事や道理のことです。つまり、「倫理」とは「コミュニケーションの仲間が「うまくやっていく」方法です。コミュニケーションの形は変化します。かつては男性ばかりだった職場コミュニケーションで女性が活躍しています。地域コミュニケーションに外国人の仲間も増えました。他にも多様なコミュニケーションがありますが、その時の仲間がうまくやっていく方法は状況に応じて考えるしかないです。一人称複数の視点は「他者も自分である」という想像力を呼び起こしますし、子どもや孫、次世代の生活や環境を意識するように導きます。全ての人の視点を持つことは難しいですが、家族・職場・地域コミュニケーションの仲間の声を聴いてみよう、心をオープンにすることが、うまくやっていく方法への一歩ではないかな、と私は思います。

2人目の出産の際に助産院で妊婦体験のジャケットを着ている筆者